

《エステルの特ペストリー》の政治的役割

ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメールの特婚式(1468年)におけるイメージ戦略をめぐって—

今井 澄子(大阪大谷大学)

1468年のこと、四代目ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメール(突進公、在位1467～77年)は、ブリュージュのプリンゼンホフで、イングランド王エドワード4世の妹マーガレット・オブ・ヨークとの特婚式をおこなった。この式に伴って開かれた宴会、槍・騎馬試合、行列、劇などのスペクタクルは9日間にもわたり、その「大げさなまでの華々しさ」(Calmette 1976)は、公国の年代記作者ド・ラ・マルシュも伝えるところである。

一連の特宴には、特ペストリーやタブロー・ヴィヴァンなどのイメージも多数展示された。特ペストリーは、その高価さと大きさゆえ、所有者の富やメッセージを示す効果的な手段であったが、先行研究では、とくに旧約聖書の『エステル記』を題材とする《エステルの特ペストリー》につき、従順かつ勇敢なエステルがブルゴーニュ公妃のあるべき「モデル(模範)」として示された点に注目してきた(Weightman 1989)。他方で、特ペストリーの所有者シャルルの立場からは、本作品の意味が十分に検討されたとは言い難い。しかし、代々のブルゴーニュ公が特ペストリーを政治的場面で利用してきたことに鑑みるに、《エステルの特ペストリー》もまた、シャルルの視点から詳細に分析する必要がある。

そこで本発表では、第一に、シャルルの特婚式で展示された、もしくは図像上関連すると推定される《エステルの特ペストリー》(サラゴサ、大聖堂付属美術館/ミネアポリス美術研究所)を、エステルの図像伝統と比較する。それにより、公の注文作品には、従来好まれた「失神するエステル」の場面よりも、エステルの夫となるペルシア王アハシュエロスの権威と、王の開く祝宴場面が強調されていることを指摘する。そして、これらの場面がブルゴーニュ公国風に表わされていることから、本作品に公国の富や公の優位性を誇示する政治的意図が込められていると位置づける。第二に、本作品の政治的役割を、ブルゴーニュ公国の情勢と特婚式の目的から検討する。まず、1467年に先代から公の位を継承したばかりのシャルルにとって、当時、イングランドとの関係に配慮しつつ、新しいブルゴーニュ公としての権力を誇示することが喫緊の課題であったことに注目する。また、式の場に飾られた他の特ペストリーは、旧約の士師ギデオンのフランク王クローヴィスなどを題材としており、ブルゴーニュ公の「モデル」としてシャルルの権威を強調していた。そこから、《エステルの特ペストリー》もまた、「新しいエステル」としての公妃をたたえつつ、じつはアハシュエロス「モデル」とするシャルルと彼の統治する公国を称揚する役割を担っていたと結論づける。

本発表により、ブルゴーニュ公の「モデル」とそのイメージ利用について調査してきた発表者の研究の射程も拡張されることとなる。